

国際交流基金から委嘱された 6 名の国際展事業委員会が、顔合わせの会議の後、国内外の 24 名の推薦委員からノミネートされた複数の作家の推薦リストをもとに 2 回にわたる選考会議を開催した。基金側からは一作家、もしくは継続に活動している一コレクティブを選定すること、選考作家は日本の現代美術を代表するのにふさわしい存在であり、ある程度の国際的な経験があることが望ましいことが前提となる条件として伝えられた。このような方針は前回の選定方法をほぼ踏襲したものである。

1 回目の選考会議では事前に目を通しておいた候補者の資料と推薦者のコメントをもとに、まず各委員が個別に一わたり意見を述べ、それを踏まえて段階的に数を絞り込んでいった。討議を重ねた結果、5 名を候補者として残すことにし、各候補者に参加の可能性の確認と基本的な展示プランの提出をお願いすることとした。

2 回目の選考会議ではプランの提出が時期的に難しかった 1 名を除いた 4 名のプランについてそれぞれが個別の評価をした後、相互比較をも含めたより具体的な討議を行った。国際的なコンテキストの中での評価に耐えうるか、作家としてのアイデンティティを十分に備えているか、日本館の展示スペースでの効果を期待しうるか、プラン通りの展示を実現しうるかなどについて議論を交わしつつ選考を進めた。意見が分かれる局面もあり、何度か投票を繰り返すことになったが、最終的には大多数の支持で毛利悠子が選定された。

毛利のプランは腐りゆく果物に直接電極を差し込み、水分値の変化を電気変換して持続音と光とを生成する音響彫刻であり、植物という生命体と電気テクノロジーとが一体されているという点では優れて今日的な問題意識が見られる。しかし毛利がいうように果物が甘い腐臭を放ちつつ土へと帰っていくというそのプロセスは生命の循環の象徴であり、また環境問題への先鋭な批評でもありうるだろう。日本館の展示室の特徴である天井と半地下のピロティーを貫く大きな開口部をダイナミックに生かそうとする、これまでになかった大胆なプランにも大いに期待したい。

建畠 哲

(五十音順、敬称略)

●最終候補作家

風間 サチコ
鴻池 朋子
志賀 理江子 ※
毛利 悠子
百瀬 文

※志賀氏におかれては、選考期間が他の展示の開幕直前と重なり、日本館展示案の検討が極めて難しかったため、選考を辞退された。

●国際展事業委員会

片岡 真実
建畠 哲
野村 しのぶ
松本 透
南 雄介
鷲田 めるろ

●推薦委員

荒木 夏実
飯田 志保子
植松 由佳
逢坂 恵理子
岡部 あおみ
笠原 美智子
神谷 幸江
金井 直
木村 絵理子
蔵屋 美香
黒沢 聖覇
沢山 遼

榎木 野衣
島 敦彦
徳山 拓一
福永 治
保坂 健二郎
三木 あき子
光田 由里
藪前 知子
山峰 潤也
Gregor Jansen
Reuben Keehan
Gabriel Ritter